

論文

# 近代における文体革命の中日対照研究

劉 哲

広島大学大学院文学研究科博士課程後期

## Comparative Study of Chinese and Japanese Vernacular Movement in Modern Period

LIU Zhe

**Abstract:** In the mid-nineteenth century, Western industrialized countries forced China and Japan to abandon their isolationist policies and be incorporated into the international trade framework to expand their markets. However, since the two countries played passive roles, they called for language reform by themselves to resolve the unequal situation. The vernacular movement, which is rising in both China and Japan, has many similarities because of the similar social and cultural background. Although Chinese and Japanese languages are different, there are many differences between the movements. Consequently, the significance of comparative studies on the Chinese and Japanese vernacular movements has attracted the attention of researchers. However, most studies restrict the Chinese vernacular movement to the reform of the new culture movement in 1919 and rarely analyze the vernacular movement in the late Qing Dynasty and the 1930s. This paper compares the vernacular movements of China and Japan based on the specific circumstances of the movements. Moreover, the paper summarizes the role of vernacular movements in China and Japan's language reform according to the relationship analysis between the vernacular movement and the spelling reform.

**Keywords:** the vernacular movement; stylistics; language reform; language planning

### 1. はじめに

19世紀中期、西欧先進諸国は市場拡大のために、中国と日本に鎖国政策を放棄させ、両国を国際貿易の枠組みに組み込んだ。劣勢に立たされた両国は不平等な状況を解消するために自ら改革を求め、近代国民国家の形成を目指した。近代化の過程において、両国の政府は表音文字を使用する、言と文の隔たりがない、統一されたことばがあるなどの特徴を持つ西欧諸国言語に対

して、表意文字である漢字と、文語体を用いている自国の言語を国家形成と国民教育の障害として捉えた。19世紀後期、日本と中国では国語国字、文体、音声のそれぞれを改革・統一し、言語の近代化を開始した。

日本の国語改良運動は中国の国語運動より約30年に早く始まったため<sup>1</sup>、その影響は中国にも及んだ。そのうち、日本の文体革命<sup>2</sup>における言文一致思想は中国に伝わり、国語運動のスローガン「言文一致、国語統一」となった。しかし、当時の中国において、言語学者は言文一致思想を日本のそれとは異なる意味で解釈したため、両国の文体革命の状況にも差異が生じた。その一方、両国の文体革命は社会的・文化的な背景が似ている時期に起きたため、共通点も存在している。そこで、両国の状況を比較し、相違点と共通点について分析する必要があると考えられる。

両国の文体革命の関連性についての比較研究は少なくない。沈（1985）は共通的な社会背景、翻訳活動の隆盛及び両国の文化交流が日本の言文一致運動と中国の白話文運動がほぼ同じ時期に生じた重要な理由であると指摘している。陽・土屋（1990）は両国の運動を比較した上で、その過程と推進者を検討し、文体革命の意義が文章の平明性、細密性、俗語の尊重、句読法の確立、客観的描写性、近代の写実にあると述べている。小池・鄭（2001）は文化的・歴史的背景を分析した上で、両国の文体革命の共通点が新たな文章表現の方法と近代の口語文体の確立にある一方、相違点として文章の難しさがどのように認識されたかという点を指摘している。すなわち、日本では文章の難しさが漢字の難しさと認識されたのに対して、中国では文章の難しさが文言文自体の難しさと認識されたのである。劉（2004）は言文一致運動と白話文運動の背後に両国の思想の変化、階級間における発話権の変更、文学の解放と現代民族国家の構造といった要素があると指摘している。雷（2008）は中国の白話文運動がイデオロギーによって起きたのに対して日本の言文一致運動が小説家によって完成され、政治的意味合いが薄いと述べている。王（2009）は清末の白話文運動と日本の言文一致運動を比較し、前者の目的は階層間の言語差を取り除くことであつたのに対し、後者の目的は中国文化から離脱することであつたと指摘している。

以上の研究では中国の文体革命を1917年からの五四運動期の白話文運動に限定していることが多い。しかし、中国の文体革命はすでに清末から始まっていたのである。また、1930年代の大衆語運動、1950年代の方言小説運動

も文体革命の問題意識を継承したものと見える。したがって、本稿は全期にわたる両国の文体革命の状況を把握した上で両者の比較を行う。また、文体革命と文字・音声改革の関係を分析し、言語近代化における文体革命のあり方も検討する。

## 2. 日本の言文一致運動

山本(1981)が「言文一致運動は、まさしく日本の文章表現上の大革命であったのですが、社会的諸事情もからんで、その達成には、前島密が、将軍徳川慶喜に「漢字御廃止之議」を建白して、漢字の全初とそれにかわるかな書き言文一致の文章の必要を、初めて唱えた慶応二年十二月(一八六七)から、昭和二〇年の戦敗の翌年(一九四六)に、アメリカの教育使節団の勧告に従って、官庁公用文の口語法採用が、やっと実現した時まで、実に七九年かかっております<sup>3</sup>と述べているように、日本における「言文一致」という意識は前島密の「漢字御廃止之議」まで遡れる。前島(1866)は「国文を定め文典を制する」と要求し、「口舌にすれば談話となり筆書にすれば文章となり口談筆記の両般の趣を異にせざる<sup>4</sup>」ことを望んでおり、この時にすでに「言文一致」の意識が芽生えていたと考えられる。

江戸後期から明治初期にかけて主流の文体は漢文直訳体と欧文直訳体であった。前者はよく時事論、政治論や新聞雑誌で使用され、後者は外国の文章を日本語に翻訳する場合に使用された。しかし、明治初期の文明開化の風潮や国字改良運動と共に、新思想の先駆者らは文章の平易化を主張した。西周(1874)は『明六雑誌』第一号の「洋字ヲ以テ国語ヲ書スルノ論」で、ローマ字による言文一致文の使用を提唱した<sup>5</sup>。約10年後、三宅米吉(1884)は「ぶんの かきかた に つきて」で仮名の言文一致文の使用も提唱した<sup>6</sup>。神田孝平(1885)は「文章論ヲ読ム」で「平生説話ノ言語ヲ以テ文章ヲ作レハ即チ言文一致ナリ<sup>7</sup>」と述べ、「言文一致」という用語を初めて用いた。1886年に物集高見は『言文一致』を著して、文章を口語文のようにすると主張した<sup>8</sup>。

明治20年代から、口語体が小説で用いられ、言文一致体小説も出現した。1887年に二葉亭四迷が「だ」調で『浮雲』を著し、言文一致体の先駆者となった。同年、山田美妙が「だ」調で『風琴調一節』(1887)、『武蔵野』(1887)といった言文一致小説を発表した。その後、山田美妙は「です」調に

移り、『胡蝶』(1889)、『いちご姫』(1889)などの作品を著した。同時期に、「だ」調と「です」調以外に、「である」調、「であります」調で小説を書く試みもあったが、草創期<sup>9</sup>の言文一致小説の大半が「です」調を採っていた<sup>10</sup>。ところが、1889年半頃から国粹保存の思潮を背景に言文一致運動が不振に陥り、代わって「雅俗折衷文」、「和漢洋折衷体」、「新国文運動」のような非言文一致の文体が登場した。1894年頃、尾崎紅葉は写実小説『二人女房』において雅な地の文と俗な会話という古文体の形式に矛盾を感じて、途中から「である」調を試みた。『二人女房』の後の『隣の女』、『紫』、『青葡萄』で古語文末の割合は減少し、『多情多恨』では「である」調で成熟した言文一致小説を創作した。尾崎紅葉の試みは同時代の小説家に大きな影響を与え、言文一致の復活の契機ともなった。その後、嵯峨の屋おむろ、田山花袋、泉鏡花らも「である」調で言文一致の小説を書き始め、言文一致運動は再び盛り上がった。1897年頃、評論界で今後の小説の文体として言文一致体がふさわしいかどうかについて争論が起った。この時、雅俗折衷体が洗練された文体で、婉曲、優雅などの特徴があると考えられたのに対して、言文一致体は露骨で冗漫、未熟であり、下品な表現と非難された。それに対して、言文一致体の支持者は文章の形式より思想を重視すべきであるという理由でこうした主張に反対していた。

1900年に「言語学会」の機関誌「言語学雑誌」の第一巻の第二号で、文体はすべて「口語体」(ここで初見)を採用することが宣言され、言文一致体への積極的な態度が示されていた<sup>11</sup>。同年、前島密、加藤弘之など有力な言語学者と教育学者によって「言文一致会」が結成され、言文一致運動は民間の運動から政府機関が主導する活動になった。1901年、「言文一致会」は貴・衆両院に「言文一致の実行に就いての請願」を提出し、両院に採択された。同年、「全国聯合教育会」で「小学校の教科書の文章は言文一致の方針によること」が可決された。1904年に小学校で国定教科書(第一期)の使用が開始され、第一期国定『尋常小学読本』が常体では「である」調、敬体では「です」調を採用した。その後に口語体教材は次第に増大し、言文一致体(口語体)は標準語の文体として認められた。

文学界では明治30年代に正岡子規・高浜虚子らが写生文運動を展開して、物事をありのままに描写する写生文で言文一致体を徹底的に実行すると宣言した。40年代には自然主義文学運動が始まったが、文体上は言文一致体が選

ばれた。こうした動きの結果、明治40年代までに文芸雑誌掲載の文章はほとんど言文一致体で書かれるようになり、言文一致体の不動の地位が確立された。

また、明治時代には方言の差異も相互理解を阻んでいた。方言で文章を書く、当然他の地域の人には読めないことになる。この状況に対して、二葉亭四迷、山田美妙、坪内逍遙などの作家は当時全国で最も通用していた東京語を文章語として使うことを主張した。明治10年代後半から20年代初頭にかけて、廃藩置県により東京と地方の交流が多くなり、東京語が使える地方在住者も増加した。そこで、東京語で書かれた小説が大いに歓迎された。言文一致運動が最初の興隆期を迎えたこの時期に「東京語」の主導権も次第に認められていったのである<sup>12</sup>。明治33年の『言語学雑誌』では「言文一致体」ではなく「口語体」という新名称を用いるのは「東京語に修練彫刻を加え、いきた言語教育を重んじて、いきた口語の上に立つ新文体を生み出さないと主張し、誤解を招きやすい従来の「言文一致」の語のかわりに「口語体」の新文体名を使用している<sup>13</sup>と述べられており、「修練彫刻を加えられた」東京語が、「言文一致体」に代わる「口語体」となることが主張された。こうして、東京語は全国共通の文章語として採用されたのである。

### 3. 中国の文体革命

前述の通り、中国の「文体革命」という場合、一般には胡適、李大釗が主導する1919年の五四運動期前後の「白話文運動」を指す。しかし、白話文運動はすでに清末から始まっており、この時に維新派は文言文のかわりに白話文を教育用語として普及させようと試みた。それを基盤として、1919年頃に胡適などの知識人による白話文運動が起こり、白話文学を提唱したのである。1930年代になると、白話文文学より民衆の話しことばに近い「大衆語文学」が流行し、大衆語運動が起った。また、中華人民共和国が成立した後の1950年代に方言文学に対する争論が生じた。このように清末から1950年代までの文体に対する議論には、いくつかの段階がある。本稿では清末から1949年までの動向を検討する。

白話文というのは近代に出現した新たな文体ではなく、宋の時代から民間で流行しはじめたものである。アヘン戦争の後、中国では実業の発展と共に、外国の書籍の翻訳がさかんになり、翻訳語として白話文体も使用された。ま

た、当時宣教師が教会学校を創立し、言語教育を行っていた。教会学校の学生には農民や下層民衆が多かったため難読な文言文のかわりに白話文を使用していた。当然、翻訳された外国の作品や教会学校における教育用の文章の中には西欧の新たなことばがあり、文の構造も伝統的な文言文と異なっていた。こうした要素は、現代白話文の形成に影響を与えた。それと同時に、清末には『官場現形記』、『老残遊記』のような長編白話小説も続々と刊行された。このように、清末の運動の開始以前に、白話文はすでに教育と文学作品で使われていた。しかし、当時正統な地位にあった文体はまだ文言文であり、白話文はただ下層民衆の文体と捉えられていたのである。

1887年、黄遵憲は日本の影響を受けた著作『日本国志』で「盖语言，文字合而为一，绝无障碍，是以用之便而行之广也（日本の言語と文字が一致していることは障害なく、使用することが便利で、使える範囲も広い）」<sup>14</sup>と述べている。また、「言」と「文」が一致する文体は「适用于今、通行于俗（今に適用でき、世に通じる）」<sup>15</sup>のものであり、このような文体を使用すべきと主張した。その後、戊戌の変法を主導した梁啓超が1896年に『变法通議』で言文分離が初級教育を妨げると述べ、「俚語」を教育用語として使用すべきと主張した<sup>16</sup>。しかし、黄と梁は教育を普及させるために白話文の使用を提唱するだけで、文言文の廃止までは言及しなかった。1898年、裘廷梁は『論白話為維新之本』で「崇白话而废文言」<sup>17</sup>というスローガンを出し、はじめて文言文の廃止を提議した。こうした運動を経て、清末民初（1897-1918）には白話文を使用する新聞と雑誌は370種類以上に上り、『大公报』をはじめ50種類以上の文言文の新聞と雑誌に白話文のコラムが設けられていた<sup>18</sup>。このように、清末の白話文運動は決定的なものではなかったが、白話文が広く使用される契機となった。

中華民国が成立した後、封建制度の終わりと共に小学校における儒教經典の教育も廃止された。しかし、袁世凱が政権を取った後、王政復古のために儒教の教育が再び始められた。1916年に袁世凱が死亡した後、民主的で自由な雰囲気が戻り、儒教の教育は再度教育部によって廃止された。そして、1917年に胡適は『新青年』で「文学改良鄒議」を発表し、「吾惟以施耐庵<sup>19</sup>，曹雪芹<sup>20</sup>，吴趸人<sup>21</sup>为文学正宗，故有“不避俗字俗语”之论也（私は施耐庵、曹雪芹と吴趸人の作品を文学の正統と考えるから、俗字と俗語の使用を避けるべきではないと主張する）」<sup>22</sup>と述べて、中国文学の「正統」を長編白話小説と

主張した。同年、陳独秀は「文学革命論」を発表し、「建设明了的通俗的社会文学（分かりやすく通俗的な社会文学にする）」<sup>23</sup>ことを強調した。胡と陳の考えは錢玄同と劉半農、魯迅などの支持を受け、白話文で書かれた文学作品が急増した。1918年、魯迅の「狂人日記」が『新青年』で発表され、「中国最初の現代白話文」と認定されている。周有光（1998）は白話文運動は「文学革命」と呼びうるものであり、3つの意味があると述べている。まずは文言文を白話文に変える文体改革を推進したことである。次は既存の文学が巧みなことばを使って典故を濫用し形式主義に陥っていることを批判し、现实生活を描写する作品を提唱したことである。最後に、思想の上で専制的な封建制度思想に反対し、自由で民主的な精神を主張したことである<sup>24</sup>。1918年、胡適は「建設的文学革命論」で国語運動における文学文体の重要性を強調し、「国語的文学，文学的国語」が文学革命の唯一の宗旨と提唱した<sup>25</sup>。文学革命は国語に相応する文学を作ることが目的であった。国語というべき文学があれば、文学というべき国語ができる。それによって、国語が本当の国語になると主張したのである。1920年に全国の小学校の教科書の文体を「白話文」に変更するという訓令が教育部によって公布され、小学校の「国文課」も「国語課」に変更された。これで、白話文は教育用語として、正式に政府に認められるようになった。

1930年代、文言文復興の思想が社会で流行し、文体についての議論が再び盛り上がり、「大衆語運動」が始まった。1930年、魯迅は「文芸的大衆化」、郭沫若は「新興大衆文芸的認識」を発表し、文芸言語の大衆化を提唱した。同年、中国左翼作家聯盟が成立し、無産階級文学の発展を標榜した。ここでは、工人与農民が読める文学作品の創成が目指され、作中の方言の使用も支持された。中国左翼作家聯盟以外の大衆語運動の支持者について、1934年に文言文復興の思潮に関して陳望道は「関与大衆語文学的建設」を発表した。陳は大衆語を「大众说得出来，听得懂，写的顺手，看得明白（大衆が話せる、聞いたら分かる、書けば支障がなく、読めば理解できる文章である）」<sup>26</sup>と定義した。大衆語運動はその後、ラテン化新文字運動と結びつき、五四運動期における白話文自体に対する問題点を批判し、ラテン化新文字で書かれ、大衆が実際に使っていることばの使用を求めるようになったが、文体に関する理論は少なくなった。現代の中国の文体は五四運動期で形成された文体をもとにして戦後に完成したものである。

#### 4. 近代文体革命における中日比較

以上、日本と中国の言文一致運動の流れをそれぞれまとめた。日本と中国は同じく「言文一致」を追求したが、文体革命の過程において相違点も多く存在する。本節は両国の言文一致文体、またはその文体に反映された思想を比較する前提として文体革命が両国の言語近代化に果たした役割を分析する。

##### 4.1 言文一致文体について

「言文一致」というのは文字通りに「言」すなわち「話しことば」と「文」すなわち「書きことば」の一致を目指すものである。明治初期の日本では話しことばを書きことばに近づけようという主張も存在したが<sup>27</sup>、一般的には書きことばを話しことばに近づけるということを指す。話す通りに文章を書くことは両国の文体革命の共通の目標であった。しかし、話しことばと書きことばの一致は本当に実現できるのだろうか。1886年、帝国文科大学教授物集高見は『言文一致』を出版し、「文章は、話しのやうに、書かねばならぬ」<sup>28</sup>としているが、1902年に「言文一致の不可能」を発表し、「会話と記録とは、人稱同じからずして、格も、亦も異なるに、時も異同ありて、文末表現の趣も相違せるを、いかでかは、打混じて、一筆に書くを得ん」<sup>29</sup>とし、会話文（話しことば）と記録文（書きことば）の区別を無視して強いて一致させることは困難だと論じている。話しことばと書きことばの区別についてWJ. オングは『声の文化と文字の文化』で「書くことや書かれたものが、そうしたもののとして、話と異なっているのは、それらがかならずしも無意識からあらわれてくるものではないからである。話されることばを書かれたものに置き換える過程は、意識的に適用される明言可能な規則によって支配されている」<sup>30</sup>と述べているように、書くことは人為的な行為であるため、書かれたものも洗練され、意識されたものである。特に文学作品は起承転結や比喻などの表現技術が必要であり、話したものをそのままに記述するだけでは足りないと考えられた。このように、言文一致体を採用する際には話しことばと書きことばの矛盾を克服されなければならない。両国はこの問題を解決するために、文語体と西洋言語から書きことばの要素を取り込んだのである。

明治初期の欧化万能・諸物改良という時代思潮を背景に、西洋文学が大量に翻訳されるなかで、漢字で翻訳された西洋の語彙も多く出現した。例えば、文末語の「である」は幕末明初の洋学者による蘭・英語の直訳で、英語の



「be」の意味で使用されたものである<sup>31</sup>。最初は翻訳での使用に限られていたが、尾崎紅葉の試用と完善によって、言文一致体の文章表現となった。また、明治時代の知識人は漢文教育を受けた人が多く、漢文要素も文章の中に取り込まれたため、現在も口語体と併用されている。例えば、「言文一致体」で書かれた小説でも、文語の要素が残っていることが指摘されている。二葉亭四迷の『浮雲』の第一回の冒頭には「千早振る神無月」という表現が登場するが、「千早振る」は奈良時代に多用された「神無月」の枕詞である<sup>32</sup>。山本(1960)が「この漢文的また翻訳文的要素のとりこみは、近代口語文形成途中において、近代俗語の欠点として非難された卑俗性や冗漫性を救うに役立ち、また精密な表現を可能にした点で、相当に必要なやむを得ないものであったといってよい」<sup>33</sup>と評価したように、言文一致体は平易性を求める一方、書きことばとして洗練さと美的要素を取り込む必要があった。

その一方、黎錦熙は『国語運動史綱』で「民国六七年間新文学运动初期所謂“白話”。这种白话，是已经有了七八百年的历史，已经产生了从《水浒传》，《西游记》直到《老残游记》这些“活文学”作品，所以当时一声呐喊，全国的学士大夫，自然而然都“不学而能”地写得出从没写过的“白话文”来（民国六、七年の際に新文学運動初期の白話は七、八百年の歴史がある。『水滸伝』、『西遊記』から『老残遊記』までの文学モデル作品がすでに存在した。したがって、この提案がされた後、全国の知識人は自然に書くことがなかった白話文が書けた）」<sup>34</sup>と述べているように、白話文は既に中国で長い歴史を持つ文体であったため、白話文で文章を書くことは知識人にとって困難ではなかった。しかし、白話文は古代の正統の文体ではなかったため、国語の文体とする前に改良が必要であった。胡適(1917)は「文学改良鄒議」で施耐庵、曹雪芹などの長編白話小説を中国文学の正統としたが、小説以外に説明文、説明文、議論文などの文章もあり、それらの文章にある説明・論証が小説の中に少ないとも述べている<sup>35</sup>。また、古代の長編白話小説には文言文の語彙も存在し、それをいかに扱うのかも問題であった。それについて、胡適(1918)は「建設的文学革命論」で2つの解決方法を提示した。一つは優秀な古代の長編白話小説の白話文を用いることである。このとき、その中に現れる文言文でしか表現できない内容は文言文で表現してもよいことになる。もう一つは外国の文学を参考にすることである。外国の文学はジャンルが豊富であり、創作方法も成熟していたため、それに基づいて白話文を創造するの

が望ましいとされた<sup>36</sup>。さらに、外国文学を参考にすることについて、傅斯年(1919)は「就是直用西洋文的款式，文法、词法、句法、章法、词枝 (Figure of speech) ……一切修辞学上的方法，造成一种超于现在的国语，因而成就一种欧化国语的文学（西洋文学のスタイル、文法、形態論、統語論、構造、比喩など一切の修辭的な表現方法をそのままに使用し、現在の国語を超える欧化国語の文学を創造する）」<sup>37</sup>と「欧化」の国語と文学が白話文の目標であったと述べている。当時の白話文運動の中心的な存在であった魯迅、錢玄同、陳独秀らも欧化思想の主張者であった。それらの知識人が提唱した白話文においては、文法と修辭的な表現方法が文言文及び古代白話文とは異なっていた。それは1930年代に瞿秋白らの大衆語運動の主張者が五四運動期の白話文を非難する重要な理由の一つである。瞿秋白(1931)の「新文学所用的新式白话，不但牛马奴隶看不懂，就是识字的高等人也有大半看不懂。这仿佛是另外一个国家的文字和言语（新文学が用いた新式白話は奴隷だけではなく、識字できる上等人も分からない。これはまるで他の国の文字と言語である）」<sup>38</sup>という批判から、当時の白話文が古代の白話文とも、話しことばとも違っていたことが分かる。呂叔湘(1991)は五四運動期の白話文の特徴を分析して「白话文原来只是用来写小说什么的，一旦要它主持大局，照顾全面，免不了缺这少那，只好四面八方取经。无论是词汇，是语法，都得实行‘拿来主义’，从外国拿，从文言拿（元来、白話文は小説などを書くためだけに使われていたが、全体を取り仕切ることが求められるようになると、どうしてもあれもこれもと不足してしまうので、あちこちから教えてもらうことになった。語彙にしても文法にしても、外国文学と文言文から取り入れた）」<sup>39</sup>と評価している。このように白話文運動で形成された新文体は文言文と西洋文学の両方の要素が含まれたものであった。

以上の分析から、両国の文体革命で生じた問題関心は異なるものの、どちらも文語体と西洋文学の創作方法を参考したことが分かる。ここで注意したいのは、本節では文語体と西洋文学が新文体に与えた影響を中心に論じたが、新文体の基礎は当時の口語だったということである。更に、その口語は方言ではなく、日本の東京語、中国の北京官話という標準語として選定されたものである。要するに、両国の言文一致体は当時の標準語を基に、文語体と西洋文学から有用な要素を吸収したものと考えられる。

## 4.2 文体革新に含む思想解放

両国の文体革命は単なる言語改革ではなく、近代新思想の浸透の結果でもあり、思想の解放も促進した。前述の通り、明治初期の日本で一般であった文体は漢文直訳体、欧文直訳体などの文語体である。言文一致体のような口語体は最初に蘭書の訳文で使用されたが、その後開化啓蒙の文章と小新聞でも使用された。それらの文章では文末表現に「ござる」、「ます」、「ございます」などの敬語が用いられ、読者に語りかけるスタイルが多かった。この時期の口語体は自然発生的なものであり、文学作品を創作することを意図したものではなかったが、既に啓蒙思想を伝播する道具として使用されていた。その後、二葉亭四迷と山田美妙が言文一致体小説を試みた際に「だ」、「である」の常体を採用した。常体は敬語より内心の声を表しやすく、文学作品も個人の感情と考えを描写するようになる。柄谷（2004）はルソーの理論と国木田独歩の小説を検討した上で、「「文」が二次的なものとなり、自分自身にとって最も近い「声」——それが自己意識である——が優位になったときに成立する。そのとき、内面にはじまり内面に終わるような「心理的人間」が存在し始める」<sup>40</sup>のように、言文一致体は人間が自分の声を聞かせてはじめて、「真の自己」を認識させたと述べている。文学者の視線は王室、貴族の物語から個人の感覚に移ったが、これは近代の個人主義とも一致している。また、言文一致体の確定も当時の文学に影響を与えた。言文一致文体が確定された約6年後、写生文運動と自然主義が勃興した。写生文運動は俳句、散文などで言文一致体の徹底的な実行を提唱し、より平易明快な文章を提唱した。自然主義は小説で目に触れた現象をそのままに無技巧で描写することを主張した。言文一致体は写生文と自然主義の共通点である物事の客観的描写を重視し、虚飾と誇張を排除することの実現に土台を提供した。一方、言文一致体は日本が古代中国の文化から脱離することをも促進した。言文一致体は文を言に近づけようとするあまり、話しことばを重視し、書きことばを軽視する危険をはらんでいる。柄谷（2004）が「言文一致の運動が根本的には文字改革であり、漢字の否定なのだ」<sup>41</sup>と述べたように、言文一致の本質は、従来の漢字の意味に基づく文章の作成から、日本語の音声を記録する文章の作成への転換であった。ここから、当時の日本が中国から伝わってきた漢文や漢字から脱離した上で、西欧の経験を借用し近代日本なりの新文体を探し出す願望を抱いていたことが確認される。

一方、中国では新文化運動で生まれた白話文運動は更に思想解放の色彩が濃い。胡適は『中国新文学運動小史』で白話文運動の中心的な理論を形式での革新を目指す「活的文学」と内容での革新を目指す「人的文学」とにまとめている<sup>42</sup>。まず、「活的文学」とは白話文で書かれた生きている文学である。清末の文体革命では、推進者は言語改革の必要性を痛感したが、支配階層としての立場から自分の地位を保つ漢字と文言文を完全に廃止するわけにはいかなかった。清末の文体革命は五四運動期の白話文運動に大きな意味をなし、両者を切り離すことはできないが、胡適、周作人などの白話文運動の主導者は、両者には質的な違いが存在すると主張している。それは、清末の文体革命がただ封建社会の支配階層による教育普及のために行われた言語改革であるのに対して、白話文運動が自由民主の新思想に基づいて行われた社会運動であるということである。胡適らの革命者からみると、文言文という文体は封建社会の産物にして支配階層の統治手段であり、平民の文学で用いられるものではなかった。また、彼らは当時の中国では清政府がすでに打倒されていたが、文言文に束縛されているため自由民主の近代思想を反映させる機会が少ないとも考えた。したがって、思想解放の第一歩が文言文の廃止とみなされるのである。それを続いて白話文で「人的文学」を書くことが目指された。「人的文学」とはヒューマンズムを原則に書かれた文学である。「人的文学」は周作人が1918年に『新青年』で提出した概念であり、胡適、陳独秀、傅斯年などの革命者に高く評価された。「人的文学」での「人」とは動物から引き継いだ獣性が残らず、古代礼法の束縛から解放されたよい生活を追求できる生物である。また、「人的文学」の原則であるヒューマンズムは「個人主義的人間本位主義」、いわゆる人を中心とする、自分と他人、人類を愛するという立場である。そして、「人的文学」の中身は、「用这人道主义为本，对于人生诸问题，加以记录研究的文，便谓之人的文学。其中又可以分作两项，（一）是正面的，写这理想生活，或人间上达的可能性；（二）是側面的，写人的平常生活，或非人的生活（このヒューマンズムを基に人生の諸問題を記録・研究した文章が人的文学である。それは2つの項目に分けられる。一つ目は直接に理想的な生活、あるいはこの世がどこまでよくなるかについて描写するもの。二つ目は側面的な見方として人間の日常生活、あるいは人間以外の生活を描写するもの）」<sup>43</sup>とまとめられている。「人的文学」の本質は封建制度から解放された「人」と「日常生活」を描写する庶民の文学とみられる。彼によ

る「人的文学」の提唱は当時の中国における思想解放にとって、不可欠なものであった。白話文も庶民文学の文体として庶民が自分の考えと感情を表す形式を提供した。したがって、白話文運動が発生した時点で、すでに単なる文体革命ではなく、封建思想を一掃するための思想運動でもあった。

しかし、白話文運動の中心人物は知識人かつエリートである。彼らが提唱した庶民文学は庶民にとって親しめる文学ではなかった。そこで、1930年代に無産階級によって完全な口語体で文学を書くことを提唱する大衆語運動が始まった。大衆語運動者からみると、文言文が封建貴族の文体であり、欧化した白話文が市民階級の文体である。彼らは無産階級が理解し、使用できる文体・ことばを追求し、方言の使用にも賛成した。このように、大衆語運動が追求したのは話しことばをそのまま記述する言と文の完全な一致である。それは実現されなかったが、無産階級には発言力を求める願望がみられる。以上のように清末から五四運動期の白話文運動、そして大衆語運動と推移することなかで、中国の文体革命の主導者は封建貴族から、知識人、無産階級へ変化した。この過程において、文体が文語体から口語体へ変化し、文体革命の思想も更に解放的になるという傾向がみられる。

以上の分析から、両国の文体革命は近代自由民主思想の影響を受け、思想の解放をもたらしたことがわかる。そして、両国では新たな文体が個人の表現活動の土台を作り上げ、文学作品の内容も貴族の物語から個人の生活と感覚へ移った。また、中国の文体革命は日本のそれより思想解放の色彩がは更に濃いものとみられ、文体の変遷にともなう思想と階級構造の変化も確認できる。政権交代の方針と同じく、中国近代の文体も支配階級しか習得できない文言文から一般民衆が使用している白話文に、更に1930年代に農民工人が読める大衆語に変化した。このことから、文体革命と同時に発言権が封建制度時代の貴族から、一般民衆に移ったことが分かる。一方、日本でも文体革命は当初啓蒙的な文章も対象としていたが、中国のように思想革命には発展せず、主に文学界への影響が注目されていた。そして、日本の文体革命の目標は中国の漢字から脱出し日本なりの文体を探し出すことであったのに対して、中国の文体革命の目標は封建時代の思想的束縛から脱却することであった。

### 4.3 言語近代化からみる言文一致運動

倉島は1902年の「国語調査委員会決議事項」を分析する際に、調査の基準となった四項目から、委員会の基本方針は文字－文章－標準語の三項に絞られ、箇条書きはその事柄の重要度に従って、あるいは達成すべき順序に従って並べられていると指摘している<sup>44</sup>。実は、文字改革、文体革新、標準語の制定という三項は日本の国語改良の主眼であると同時に、中国の国語運動のそれでもある。これは偶然ではなく、両国の似ている社会・文化的背景から生じた内的な必要性を持つ言語近代化の歩みを示すものである。本節は両国の言文一致運動と文字・音声の関係を分析した上で、言語近代化における文体改革のあり方を検討する。

日本の国語改革は国字から始まった。明治初期から漢字廃止思想が隆盛となり、それとともに漢文及び漢文訓読体などの文語体の基礎も崩れていった。一方、仮名文字論やローマ字論など当時主流の文字論は文字の表音性を肯定する傾向を示していたため、そこで、口語体である言文一致体は国語改革の精神と一致した文体であったと考えられる。しかし、言文一致体は明治20年代後半に非難の対象となった。理由として以下のようなことがあげられる。まずは言文一致体自体の問題である。言文一致体は俗語を多用し、十分に洗練されおらず、表現が下品であるなどの欠点があった。また、言文一致体は新しい文体であったため、当然文章の蓄積が十分ではなく、やや知的に高度な文章を書く際に、文語体の方が口語体よりも易しかった<sup>45</sup>。さらに、文末表現の問題もある。文語体では、文末表現から文の主語が分かるが、「だ」や「である」調で統一すれば、主語や聞き手といった会話者間の関係が分からなくなるのである。以上のことから、明治初期において言文一致体は未成熟な文体であり、特にことばの美感、洗練さを要求する文学作品で文語体のように高尚な印象を与えたいとみなされた。そして、社会思潮の影響もある。明治20年代に国粹思潮が高揚し、和漢洋折衷体や雅俗折衷体のような文語体が愛用された。以上の理由によって1890年から1894年にかけて言文一致運動は下火になり、停滞期に入った。しかし、日清戦争後、言文一致論は復活し、国語の文体として選定されるまでに至った。それは尾崎紅葉による成熟な言文一致体作品の出現と同時に、上田万年の標準語理論にも関係がある。

上田万年は日本の国語改革の中核的な人物である。1890年からドイツとフランスに留学し、1894年に日本に帰り、西欧の最新の言語理論を日本の国語

改革に応用した。上田の言う「国語は帝室の藩屏なり、国語は国民の慈母なり」のように、上田理論の核心は国語の制定にある。そして、当時西欧の言語学の影響を受けた音声主義を標榜していた上田は音声が言語の中身であるとし、西洋に倣った口語体の使用を支持した。もちろん、上田は方言をそのままに文章にすることを提唱するのではなく、東京の教養ある人士が使用することばを彫琢して、標準的な話しを作り出し、それを文章にすることを主張していた。上田は「標準語に就きて」で、標準語確立の二大要点について「第一には其実際話さるゝ上の注意、第二にはその文章上に用ゐるゝ上の注意等なり」と述べ、実際に話されている言語を標準語として選定すべきことを強調した上で、「更に一層標準語が其の地位を確固にする点は、その言語が文章上の言語となることなり。書く標準語が文章上の言語となる以上は、これを話す人より全く独立の位地を有し、暫にそのまゝ後世に残るよすがとなるのみならず、又現在伝播しゆく上の、速度をも増加する至るなり」<sup>46</sup>として標準語で書かれた文章は標準語の伝播に役立つことを指摘している。上田は言文一致文体を標準語普及の手段、ひいてはその前提としている。このことから、日本の言語近代化の全体的な視点からみると言文一致運動は国字改革の続編であり、標準語制定（ここは音声の統一を指す）の前編ともいえる。

その一方、日本の言文一致思想を受けた中国での文体革命には、その始めから日本と異なる状況があった。言文一致思想は清末に文字運動で応用された。黎錦熙は「当国語运动的第一期，那些运动家的宗旨，只在“言文一致”，还不甚注意“国语统一”，国语统一这个口号乃是到了第二期才叫出来的。就说言文一致，也不过是要用一种“切音”的工具，来代替那繁琐难写之单个的汉字，却没注意文体的改变，变文言为白话，乃是到了第三期才提倡成功的（第一期の国語運動の推進者は「言文一致」だけに注目し、「国語統一」を重視しなかった。「国語統一」は第二期から提唱されはじめた。切音字運動期における「言文一致」は「切音」というツールのみを用いて読み書きしがたい漢字に代わるものだった。文体の変化まで論じなかった。文言から白話への変更ができたのは第三期になってからである）」<sup>47</sup>と述べているように、中国における「言文一致」は当初、話しことばと書きことばの一致を指すものではなく、文字の音声の「音」と文字で書かれる「文」の一致を指していた。つまり、文字を見て発音ができれば「言」と「文」の一致が実現したということになったのである。清末にも文言文を廃止し、白話文の使用を提唱する思想

が存在していたが、文体の徹底的な革新を追求するのは1917年以後の白話文運動からである。その時の国語運動の背景として、注音字母案が制定され、北方と南方の方言の音声を調和した折衷的な「老国音」が中華民国政府によって制定されたということがあった。しかし、政権交代と共に開放思想と復古思想が交錯し、それらの国語政策は計画に留まり、実施されなかったのである。白話文運動と共に民衆の思想が解放された後、1920年代から、注音符号が全国で普及し、国音字母第二式である国語ローマ字案も制定された。更に、ラテン化新文字運動が始め、文字運動は全体的に表音化の方向へ展開した。一方、白話文の基礎是北京官話であるため、白話文運動後、民国初期に制定された「老国音」も北京官話にもとづく「新国音」に移行した。このことから、白話文運動以前には、文字と音声に関する言語運動の不徹底性がみられる。一方で、思想の解放は民衆の思想を古代の封建的な統制から解放し、文字と音声改革の思想・言語基礎を築いた。国語運動のスローガン「言文一致、国語統一」のとおり「言文一致」が達成された故に「国語統一」が実現した。

両国の言語近代化の過程をみると、文字、文体、音声などの言語を構成する要素は互いに分離しているわけではなく、相互に影響しているということがわかる。一つの要素に関する言語計画が変化すると、他の要素もその影響を受けて変化するということになる。したがって、言文一致運動と文字改革および標準語の統一は内的な関係を持っていた。その関係は社会と言語という二つの視点から分析できる。社会的な視点からみれば、両国は西洋諸国の侵略に対抗するために、自ら国家の近代化を追求した。国民を育成するためには言語の平易性と統一性が必要であり、国語改革の全体はその目標に応じたものであったといえる。平易な文字と文体によって国民教育の困難を軽減し、国語教育を通して標準語を普及する。また、標準語の普及を通して同じ言語を使用する国民の愛国心を喚起し、「国家一国民一国語」という三位一体の関係を構築する。この視点からみると、文字の表音化、言文一致体の選定、標準音声の制定は全て近代国民国家の形成という目標に向かっていたのである。そして、言語理論という視点からみると、国語改革は当時西欧言語学の「音声主義」にしたがって展開したのである。「音声主義」はことばの本質を「音」とであると主張し、文字を軽視した。この考えに基づいて表音文字と口語体は漢字および文語体より「音」を表現しやすいと考えられ、文字も文体も



音声に付き従う立場に置かれたのである。以上二つの視点からみれば、言文一致思想は「言」と「文」、すなわち「文字」、「文体」と「音声」のかけ橋であり、言語近代化の全体を貫く思想と考えられる。

## 5. おわりに

本稿は日本と中国の文体革命をまとめた上で、言語面と思想面から比較を行った。言語面では日本の言文一致体は新たな文体である一方、中国の白話文は古代から存在していた文体であるという差異があった。また、両国とも文体革命のなかで話しことばと書きことばの完全一致を追求したことがあるが、結局は挫折したため、両国とも口語体文体を改良し、文語体と西洋文学の文学創作の手法を参考とした。

思想面では口語体の採用は民衆が個人の感情を描写する土台を作り上げ、文学作品の内容も貴族の物語から個人の生活へと移った。しかし、中国の文体革命は日本より思想解放の色彩は更に濃いとみられ、文体の変遷は支配階級から一般民衆への政治的主体の変化を反映していた。日本でも文体革命は当初啓蒙的な文章の文体として用いられたが、中国のように本格的な思想革命にはつながらず、主に文学界への影響が注目されていた。そして、日本の文体革命の目標は中国の漢字から脱出し日本なりの文体を探し出すことであつたのに対して、中国の文体革命の目標は封建思想の束縛から解放されることであつた。

最後に、文体革命と国字改革、標準語制定の関係を踏まえ、両国における文体革命と言文一致思想のあり方を考えたい。文字、文体と音声改革は内的な関係を持ち、言文一致思想は「言」と「文」、すなわち「文字・文体」と「音声」のかけ橋であり、言語近代化の全体を貫くと考えられる。本稿は文体革命を中心に比較研究を行ったが、両国の文字改革、標準語の制定、または国語改革の全体についても詳しく分析する必要がある。それを今後の課題としたい。

付記：この論文は未公開の博士論文の一部である。

## 後注

<sup>1</sup> 日本の明治時代から第二次世界大戦が終わるまでの国語に関する改革は「国語改良運動」、中国の清末から中華人民共和国が建国するまでの国語に関する改革は「国語運動」と称されている。本稿では、日本あるいは中国の改革のみを論じる場合はそれぞれの名称を使用するが、両国の改革を一緒に論じる際は「近代国語運動」を使用する。

<sup>2</sup> 「文体革命」という言い方は山本正秀（1981）『言文一致の歴史論考 続編』桜楓社 pp.13から引用した。本稿では日本の「言文一致運動」、中国の「清末白話文運動」、五四運動期の「白話文運動」と1930年代の「大衆語運動」といった、近代中国の文体革命の総称、または両国近代の文体に関する言語改革の総称として使用する。

<sup>3</sup> 山本正秀（1981）『言文一致の歴史論考 続編』桜楓社 p.13

<sup>4</sup> 前島密（1866）「漢字御廃止之議」国語教育研究会編（1929）『國語國字教育史料總覽』国語教育研究会 p.18

<sup>5</sup> 西周（1874）「洋字ヲ以テ国語ヲ書スルノ論」国語教育研究会編（1929）『國語國字教育史料總覽』国語教育研究会 pp.13-27

<sup>6</sup> 三宅米吉（1884）「ぶんのかくかたにつきて」文學博士三宅米吉著述集刊行會編（1929）『文学博士三宅米吉著述集』目黒書店 pp.789-804

<sup>7</sup> 神田孝平（1885）「文章論ヲ読ム」山本正秀編（1978）『近代文体形成資料集成 発生編』桜楓社 pp.214-215

<sup>8</sup> 物集高見（1886）『言文一致』山本正秀編（1978）『近代文体形成資料集成 発生編』桜楓社 pp.265-290

<sup>9</sup> 山本正秀は言文一致運動を七期に分けた。第一期発生期（1866-1883）、第二期第一自覚期（1884-1889）、第三期停滞期（1890-1894）、第四期第二自覚期（1895-1899）、第五期確立期（1900-1909）、第六期成長・完成前期（1910-1922）、第七期成長・完成後期（1932-1964）山本正秀（1965）『近代文体発生の史的研究』岩波書店 p.33

<sup>10</sup> 山本正秀（1981）『言文一致の歴史論考 続編』桜楓社 p.40

<sup>11</sup> 山本正秀（1981）『言文一致の歴史論考 続編』桜楓社 p.45

<sup>12</sup> イ・ヨンスク（1996）『「国語」という思想：近代日本の言語認識』岩波書店 p.71

<sup>13</sup> 山本正秀（1981）『言文一致の歴史論考 続編』桜楓社 p.45

<sup>14</sup> 黄遵憲（2016）『日本国志』岳麓書社 p.1105

<sup>15</sup> 黄遵憲（2016）『日本国志』岳麓書社 p.1109

<sup>16</sup> 梁啓超著・何光宇注（2002）『変法通議』p.121

<sup>17</sup> 裘廷梁（1898）『論白話為維新之本』徐中玉編（1994）『中国近代文学大系 文学理論集1』上海書店 p.84

<sup>18</sup> 胡全章（2010）「清末白話文運動研究的回顧、反思与展望」井岡山大学学报 p.105

<sup>19</sup> 『水滸伝』の作者

<sup>20</sup> 『紅樓夢』の作者

<sup>21</sup> 『新石頭記』の作者

- <sup>22</sup> 胡適（1917）「文学改良鄒議」歐陽哲生編（2013）『胡適文集』（第二卷）北京大学出版社 p.14
- <sup>23</sup> 陳独秀（1917）「文学革命論」歐陽哲生編（2013）『胡適文集』（第二卷）北京大学出版社 p.16
- <sup>24</sup> 周有光（1998）「白話文運動80周年」群言 p.29
- <sup>25</sup> 胡適（1918）「建設的文学革命論」歐陽哲生編（2013）『胡適文集』（第二卷）北京大学出版社 p.44
- <sup>26</sup> 陳望道（1934）「関与大衆語文学的建設」陳望道（2009）『陳望道文集』商務印書館 p.474
- <sup>27</sup> 山田美妙（1888）は「言文一致論概略」の冒頭で「今日言文一致を主唱する学者には二種類が有つて、一方は言を文に近づけること、又一方は文を言に近づけることを主唱します。言を文に近づけやうと思ふ人の過半は所謂普通文論者で、文を言に近づけやうと思ふ人の過半は所謂言文一致論者です」と述べている。山田美妙（1888）「言文一致論概略」山本正秀編（1978）『近代文体形成資料集成 發生編』桜楓社 p.414
- <sup>28</sup> 物集高見（1886）『言文一致』山本正秀編（1978）『近代文体形成資料集成 發生編』桜楓社 pp.265-290
- <sup>29</sup> 物集高見（1902）「言文一致の不可能」原文は山本正秀（1953）「言文一致史上の三つの新資料について」茨城大学文理学部紀要人文科学 pp.116-118によるもの
- <sup>30</sup> W.J. オング（1991）『声の文化と文字の文化』（桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳）藤原書店 p.173
- <sup>31</sup> 山本正秀（1965）『近代文体發生の史的研究』岩波書店 p.29
- <sup>32</sup> 小池清治・鄭譚毅（2001）「『言文一致』の展開に見る日本・中国の相違」宇都宮大学国際学部研究論集第12号 pp.91-92
- <sup>33</sup> 山本正秀（1965）『近代文体發生の史的研究』岩波書店 p.31
- <sup>34</sup> 黎錦熙（2011）『国語運動史綱』商務印書館 p.14
- <sup>35</sup> 胡適（1917）「文学改良鄒議」歐陽哲生編（2013）『胡適文集』（第二卷）北京大学出版社 pp.6-15
- <sup>36</sup> 胡適は「建設的文学革命論」で「所以我认为我们提倡新文学的人，尽可不必问今日中国有无标准国语。我们可努力去做白话的文学。我们可尽量采用《水浒传》、《西游记》、《儒林外史》、《红楼梦》的白话；有不和今日的用的，便不用他；有不够用的便用今日的白话来补，有不得不用文言的，便用文言来补助。这样去做，绝不愁没有标准白话（我々新文学を提唱する人は標準的な国語が存在するかどうかを問う必要がない。白話文学の創造に努力すればよい。我々はできるだけ『水浒传』、『西遊記』、『紅樓夢』、『儒林外史』の白話を採用すべきだが、現在では使われていないことばは使用しない。語彙が足りない場合には現在に使っていることばで補足する。文言文を使わなければならない場合には文言文を使う。このようにすれば、標準的な白話がいつか必ず形成できる)」、「西洋的文学方法，比我们的文学，实在完备的多，高明得多（西洋の文学の手法は我々の文学より、完備で高明である）」、「我们如果真的要研究文学的方法，不可不赶紧翻译西洋的文学名著做我们的模范（我々はもし本気で文学の方法を研究するのなら

ば、早めに西洋の文学の名作を翻訳し、文学のモデルにしなければならない」と述べている。胡適（1918）「建設的文学革命論」歐陽哲生編（2013）『胡適文集』（第二卷）北京大学出版社 pp.48-57

<sup>37</sup> 傅斯年（1919）「怎樣做白話文」胡適編（2003）『中国新文学大系・建設理論集』新華書店 p.223

<sup>38</sup> 瞿秋白（1931）「鬼門関以外の戦争」『瞿秋白文集』（第三卷）北京人民文学出版社 p.147

<sup>39</sup> 呂叔湘（1991）「剪不断、理還乱」呂叔湘（1993）『呂叔湘文集』第五卷商務印書館 p.360

<sup>40</sup> 柄谷行人（2004）『日本近代文学の起源』岩波書店 p.69

<sup>41</sup> 柄谷行人（2004）『日本近代文学の起源』岩波書店 p.45

<sup>42</sup> 胡適（1958）『中国新文学運動小史』歐陽哲生編（2013）『胡適文集』（第二卷）北京大学出版社 p.124

<sup>43</sup> 周作人（1918）「人的文学」胡適編（2003）『中国新文学大系・建設理論集』新華書店 p.196

<sup>44</sup> 倉島長正（1997）『「国語」と「国語辞典」の時代—その歴史—』小学館 p.40

<sup>45</sup> 野村剛史（2007）「明治スタンダードと言文一致（2）言文一致を中心に」言語・情報・テキスト14（1） p.39

<sup>46</sup> 上田万年（1895）「標準語に就きて」上田万年著・安田敏朗校注（2011）『国語のため』平凡社 p.40

<sup>47</sup> 黎錦熙（2011）『国語運動史綱』商務印書館 p.91

## 参考文献

イ・ヨンスク（1996）『「国語」という思想：近代日本の言語認識』岩波書店

柄谷行人（2004）『日本近代文学の起源』岩波書店

川戸道昭・榊原貴教編著（2014）『欧米文学の翻訳と近代文章語の形成：漢文対応の日本語から欧文対応の日本語へ 資料集成近代日本語「形成と翻訳」別巻』大空社

倉島長正（1997）『「国語」と「国語辞典」の時代—その歴史—』小学館

山本正秀（1965）『近代文体発生の史的研究』岩波書店

山本正秀（1981）『言文一致の歴史論考 続編』桜楓社

黄遵憲（2016）『日本国志』岳麓書社

黎錦熙（2011）『国語運動史綱』商務印書館

梁啓超著・何光宇注（2002）『变法通議』華夏出版社

W.J. オング（1991）『声の文化と文字の文化』（桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳）藤原書店

- 上田万年（1895）「標準語に就きて」上田万年著・安田敏朗校注（2011）『国語のため』平凡社 pp.38-46
- 神田孝平（1885）「文章論ヲ読ム」山本正秀編（1978）『近代文体形成資料集成 発生編』桜楓社 pp.214-215
- 小池清治・鄭譚毅（2001）「「言文一致」の展開に見る日本・中国の相違」宇都宮大学国際学部研究論集第12号 pp.89-116
- 西周（1874）「洋字ヲ以テ国語ヲ書スルノ論」国語教育研究会編（1929）『國語國字教育史料總覽』国語教育研究会 pp.13-27
- 野村剛史（2007）「明治スタンダードと言文一致（2）言文一致を中心に」言語・情報・テキスト14（1） pp.35-67
- 前島密（1866）「漢字御廃止之議」国語教育研究会編（1929）『國語國字教育史料總覽』国語教育研究会 pp.17-20
- 三宅米吉（1884）「ぶんの かくかた に つきて」文學博士三宅米吉著述集刊行會編（1929）『文学博士三宅米吉著述集』目黒書店 pp.789-804
- 物集高見（1886）『言文一致』山本正秀編（1978）『近代文体形成資料集成 発生編』桜楓社 pp.265-289
- 山田美妙（1888）「言文一致論概略」山本正秀編（1978）『近代文体形成資料集成 発生編』桜楓社 pp.414-421
- 山本正秀（1953）「言文一致史上の三つの新資料について」茨城大学文理学部紀要・人文科学（3） pp.108-120
- 陳独秀（1917）「文学革命論」歐陽哲生編（2013）『胡適文集』（第二卷）北京大学出版社 pp.15-18
- 陳望道（1934）「関与大衆語文学的建設」陳望道（2009）『陳望道文集』商務印書館 pp.473-475
- 傅斯年（1919）「怎樣做白話文」胡適編（2003）『中国新文学大系・建設理論集』新華書店 pp.217--227
- 胡全章（2010）「清末白話文運動研究的回顧、反思与展望」井岡山大学学报 pp.105-111
- 胡適（1917）「文学改良鄒議」歐陽哲生編（2013）『胡適文集』（第二卷）北京大学出版社 pp.6-15
- 胡適（1918）「建設的文学革命論」歐陽哲生編（2013）『胡適文集』（第二卷）北京大学出版社 pp.44-57
- 胡適（1958）『中国新文学運動小史』歐陽哲生編（2013）『胡適文集』（第二卷）北京大学出版社 pp.105-163
- 雷曉敏（2008）「日本“言文一致”与中国白話文運動」天津外国語学院学報第15卷第2期 pp.32-34
- 劉芳亮（2004）「近代化視域下的話語体系變革——中国“五四”白話文運動和日本言文一致運動之共性研究」解放軍外国語学院学報第27卷第3期 pp.90-95

- 呂叔湘（1991）「剪不断、理還乱」 呂叔湘（1993）『呂叔湘文集』第五卷商務印書館 pp.358-361
- 裘廷梁（1898）『論白話為維新之本』 徐中玉編（1994）『中国近代文学大系 文学理論集 1』上海書店 p.82-86
- 瞿秋白（1931）「鬼門關以外的戰爭」 瞿秋白（1989）『瞿秋白文集』（第三卷）北京人民文学出版社 pp.137-173
- 沈迪中（1985）「巧合是怎樣產生的——中国白話文運動和日本言文一致運動」 遼寧大學學報：哲学社会科学版第5期 pp.68-70
- 王平（2009）「語言重構的兩種向度——日本言文一致運動与晚清白話文運動之比較」 蘭州大學學報社会科学版第37卷第2期 pp.37-41
- 陽英華・土屋富枝（1990）「日本の「言文一致」運動と中国の「口語文」運動との比較」 日語學習与研究第4期 pp.24-32
- 周有光（1998）「白話文運動80周年」 群言 pp.27-31
- 周作人（1918）「人的文学」 胡適編（2003）『中国新文学大系・建設理論集』新華書店 pp.193-199